

# アオサギ観察会

--- いよいよ巣立ち ---

2004年6月28日



4枚の写真はいずれも今の時期の幼鳥の様子です。羽ばたきの練習をしたり、枝伝いに巣を離れたり、あるいはすでに近くの水辺で餌を見つけようとしている幼鳥もいます。

さて、その写真とは全く関係なく、今回は無事巣立った幼鳥たちに、アオサギを詠んだ詩や歌を捧げたいと思います。

「槇のこずゑに、青鷺の  
群れて巣をもつ幽けさよ。  
空のはるかさを、日の量の  
擬りかけつつ行き消えぬ」

北原白秋 『海豹と雲』より  
コロニーの見せる静かな一面です。  
静かと言えば、北欧の神話では、ア  
オサギは沈黙の象徴でもありました。



アオサギは、古くはミトサギとも呼ば  
れていました。

「いりしほのひかたにきゑるみとさぎを  
いさりに出るあまかとやみん」  
(新撰六帖 六知家)

「霜むすぶ入江のまこもすゑわけて  
たつみとさぎのこゑもさむけし」  
(夫木和歌抄 前大納言忠良卿)



「鷺ぬれて鶴に日の照る時雨哉」蕪村  
とくにアオサギと断った句ではない  
のですが、情景としてはシラサギより  
アオサギのほうがしっくりくるような  
気がします。

アオサギと特定したものではこちらの  
句が有名。

「夕風や水青鷺の脛をうつ」蕪村

